『明暗』論

岩瀬法雲

一　「明暗」への道

漱石は大正三年十一月二十五日学習院での講演「私の個人主義」の中で、次のように述べている。

「私は此世に生れた以上何かしなければならん、と云つて何をして好いか少しも見当が付かない。恰も嚢の中に詰められて出る事の出来ない人のやうな気持がするのです。私は斯うした不安を抱いて大学を卒業し、同じ不安を連れて松山から熊本へ引越し、又同様の不安を胸の底に畳んで遂に外国迄渡つたのであります。此嚢を突き破る錐は倫敦中探して歩いても見付かりさうになかつたのです」。ところが漸く「自己本位」ということに気がついたという。「私は此自己本位といふ言葉を自分の手に握つてから大変強くなりました。今迄茫然と自失してゐた私に、此所に立つて、この道から斯う行かなければならないと指図をして呉れた」といっている。

「然しながら自己本位といふ其時得た私の考へは依然としてつゞいてゐます。否年を経るに従つて段々強くなります。其時確かに極つた自己が主で、他は賓であるといふ信念は、今日の私に非常の自信と安心を与へて呉れました。私は其引続きとして、今日猶生きてゐられるやうな心持がします。」

明治三十八年一月「吾輩は猫である」発表以来、大正五年十二月「明暗」の途中で倒れるまで、終始彼は文壇の特異な存在であったのも、この自己本位の所産であって、実に彼はこの四字の追究に生涯を賭した作家であったのである。所でその講演をした年の八月に自己否定の極主人公を自殺させる「こゝろ」を既に発表しているのであるから、彼がロンドンの旅の空で最初悟り得た自己本位とは、その内容において相当の開きのあることは、想像される。現に同じ講演中で、

「然し自分がそれ丈の個性を尊重し得るやうに、社会から許されるならば、他人に対しても其個性を認めて、彼等の傾

向を尊重するのが理の当然になつて来るでせう。」

といっている。ここでは自他を内蔵する新しい自己に立とうとしていることが分かる。

単なる自己本位は、「それから」（明治四十二年）「門」（明治四十三年）行人（大正二年）こゝろ（大正三年）と段々に追究して行って、「こゝろ」に至って極点に達し、ここで自他を平等視する新しい自己を発見しようとしたのが此の講演である。即ち、父に背き兄夫妻に背き友人に背き世の掟に背いて友人の妻を奪った代助は、偽善的なヒロイズムを捨てゝ素直に自己本位を実行した。所が「門」では、その後の代助である宗助には、始めから家族・友人・社会の背徳者として制裁を与えなければならない。だからといって作者は自己本位を引っ込めようとはしなかった。寧ろ更に徹底した形で追究しようと出直した。それが「行人」から「こゝろ」へのコースである。「行人」の一郎は社会は勿論、父にも弟にも妻にも疑惑を抱いている。信じることの出来るのは自己の教養だけである。自らの手で周囲の一切を締め出した一郎は孤独地獄に呻吟している。他に要求することの酷しい彼は、相手もまた自分と同様「際どい針金の上を踏み外さずに進んで来て呉れなければ我慢しない。」所でこの一郎も漸く握手の手を用意する日が来た。「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか」と他を責める前に自分を責めなければならないことに気がついた。そこで「行人」は終っている。「こゝろ」になると、先生の実行した自分本位は相手にその罪を告白する位では許されそうな生やさしいものではない。一郎と違って先生には肯定される何物もなくなった。最初は自分だけは大丈夫だと思っていた。だから自分の財産を横領した叔父を責めることが出来たのだが、友人Kと恋を競うようになると、突然Kを裏切って自分も叔父と同じことをしてしまっているのである。彼はもう何もかも信じることが出来なくなった。何も知らない妻のために、彼は「死んだ気で生きて行かうと決心」したこともあったが、遂に自殺してしまうのである。

自己本位が単に社会的な罪悪ですむ間は、「門」の宗助のように社会から葬られても、「山の中にゐる心を抱いて、都会に住んで」いることも出来る。その「生活は広さを失」っても「深さを増」すことも出来る。却て「尋常の夫婦に見出し難い親和と飽満」をさえ楽しむことも出来た。けれども、「こゝろ」の先生に至っては、その罪は、地上だけでなく天

上にも許されないものとなった。だから何処にも住めないのである。彼が愛する妻とすら心は別々であった。終に一口も事情を打ち明けないで死んで行かねばならなかった。

それほど恐しい自己本位の地獄図絵を「こゝろ」において繰り展げながら、三ヶ月後の講演の中で、「貴方がた自身の幸福のために、それが絶対に必要ぢやないかと思ふから申上げるのです」と、何故再び自己本位を勧めるのであるか。尤も「自己の個性の発展を仕遂げようと思ふならば、同時に他人の個性も尊重しなければならない」と言っているが、その自他を媒介するものが単に社会的なものに止まるなら、既に「こゝろ」の先生はそれをも踏み越えているはずである。媒介するものは何か形而上的なものでなければならない。即ち、自他平等視は要請する程度でその根拠は示されていない。しかしこの問題は漱石には大きな課題であった。その後「硝子戸の中」から「道草」へ、更に「明暗」へのコースは彼が最後に試みた命がけの展開であったのである。

「硝子戸の中」の十八章に、「頭の中がきちんと片付かないで困るのです」と訴える女が、「形や色が始終変つてゐるうちに少しも変らないものが何うしてもある」というのに対して、作者は、「其変るものと変らないものが、別々だとすると、要するに心が二つある訳になりますが、それで好いのですか。変るものは即ち変らないものでなければならない筈ぢやありませんか」と形而上的一元論を示唆している所がある。果して、この随筆を書き終った頃の「断片」の中で、「生死を一貫しなくてはならない、(もしくは超越)、すると現象即実在、相対即絶対でなくては不可になる」といい、「それは理窟でさうなる順序だと考へる丈なのでせう」「さうかも知れない」「考へてそこへ到れるのですか」「たゞ行きたいと思ふのです」と言っている。この一元論にその後の漱石は全存在を託そうとするのである。仏教では現象の波は実在の水を離れては存在しないという。漱石もまたそれをいうのである。従って自己本位は「回避すべき」でなく「透脱すべきもの」であるということになる。だからこそ「こゝろ」の先生のようには彼自分は死なかったのである。自己本位の百尺竿頭を登り詰めた者の更に一歩を進める道は、「こゝろ」の先生のようにそこで手を放すことでなく、同じ竿を伝って一歩を退くことに漱石は気がついたのである。仏教の所謂上転門(往相)から下転門(還相)へと転じたのである。

「道草」の最後の章で健三の細君が、「まあ好かつた。あの人だけは是で片が付いて」と安心した顔をすると、健三

は、「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない。一遍起つた事は何時迄も続くのさ。たゞ色々な形に変るから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」と、吐き出すように言う所がある。片附けようといくら努力してもそうはならないものが世の中にはある。自己本位者の健三も漸くそこに気がついて来たのである。自己の力の限界が分かって来たのである。再び「硝子戸の中」に戻るが、三十章に例の「継続中」がある。「もう御病気はすつかり御癒りですか」「ええまあ何うか斯うか生きてゐます」「何うか斯うか生きてゐる。――私は此一句を久しい間使用した。然し使用するごとに、何だか不穏当な心持がするので」、「病気はまだ継続中です」と改めた。「客の帰つたあとで私はまた考へた。――継続中のものは恐らく私の病気ばかりではないだらう。」「人の心の奥には、私の知らない、又自分達さへ気の付かない、継続中のものがいくらでも潜んでゐるのではなからうか」

どこまで行っても継続中のもの、即ち片付かないものは、それを片付けようとすればするほど益々片付かないものになって来る。それを片付いたものと錯覚していたのが、それまでの作品だったのである。だから同じ問題を繰り返さなければならなかったのである。「それから」で片付けられたと思ったものが、「門」では最初から出直さなければならず、「行人」でやっと片付きそうに見えたものが、「こゝろ」では根本的に考え直さなければならなかった。そうして結局どこまで行っても片付かないものが存在するということに気がついた。だから自己本位と片付かないものとは因果的に連続するものであると同時に、二つはまた別々の次元に立つものである。「明暗」は複雑な様相を呈しているが、それは自己本位の渦が同時にいくつも巻いているからであって、やがてその渦の中から真に片付かないものが、その芯として姿を現わすとき一篇の使命は終るのではないだろうか。この作品は未完ではあるが、方向だけはあのまゝで略察知することが出来る。

二　制作の立場

「こころ」と「硝子戸の中」との間には断層がある。「それから」以後「こゝろ」までの漱石の作家的立場は上転門（往相）であるが、「硝子戸の中」以後は下転門（還相）的であることは前に述べた。前者では作者は作中の主人公と運命を

共にして主人公の問題を作者の問題として追究している。代助・宗助・一郎・先生みな然りである。一作毎に険しい急坂を攀じ上る思いで一人寂しく登って行く。後者では作者はもう主人公一人だけの中に住むことはしない。同時にその相手方の中にも住む。住むといえばすべての人物の中に住んでいる。だからこういってもよい、作者は例えば人形使いになってすべての人物を操っているのだと。この人形使いは一作毎に操り方が手馴れて「明暗」ではその極に達している。

「硝子戸の中」の最後に、「私はまだ私に対して全く色気を取り除く得る程度に達してゐなかつた。嘘を吐いて世間を欺く程の衒気がないにしても、もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の欠点を、つい発表しずに仕舞つた」。「其所に或人は一種の不快を感ずるかも知れない」。まだ手馴れない不手際な所はあっても、「然し私自身は今其不快の上に跨つて、一般の人類をひろく見渡しながら微笑してゐるのである。今迄詰らない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、恰もそれが他人であつたかの感を抱きつゝ、矢張り微笑してゐるのである」。この人形使いの思想は深い。自分の使う人形を通して人類全体を広く微笑をもって見渡すばかりでなく、手馴れない手付きの自分自身をも同じく見下ろしている。下転門（還相）の世界である所以である。

「道草」では前作の反省、「もつと面目を失するような欠点」をありのまゝに切り開いて見せている。操り方に一段の進歩がある。人形の数は健三夫妻とその家族関係者だけではあるが、そこに一般人類をひろく髣髴させるに足るものがある。漱石は講演「模倣と独立」（大正二年十二月十二日）の中で、「泥棒をして懲役にされた者、人殺をして絞首台に臨んだもの、法律上罪になると云ふのは徳義上の罪であるから公に所刑せらるゝのであるけれども、其罪を犯した人間が、自分の心の経験を有りの儘に現はすことが出来たならば、さうして其儘を人にインプレッスする事が出来たならば、総ての罪悪と云ふものはないと思ふ。総て成立しないと思ふ。夫をしか思はせるのに一番宜いものは、有りの儘を有りの儘に書いた小説、良く出来た小説です。有りの儘を有りの儘に書き得る人があれば、其人は如何なる意味から見ても悪いと云ふことを行つたにせよ、有りの儘を有りの儘に隠しもせず漏らしもせず描き得たならば、其人は描いた功徳に依つて正に成仏することが出来る。法律には触れます、懲役にはなります。けれども其人の罪は、其人の描いた物で十分に清められるものだと思ふ。私は確かにさう信じて居る」。ありのまゝを書く自分とそれを行っていた自分とは次元が違う。書く自分は行っていた自分を見下ろしている。行っていた自分には自他は対立していたが、書いている自分にはその対立はな

い。そういう心境にあるから、書くことによって成仏し、書くことによって清められるのである。「道草」にはそうした期待がこめられていたであろう。

人形使いの世界なら遊びの世界である。元来下転門の還相回向は菩薩の遊戯三昧であると言う。「衆生疾むが故に我亦疾む」と言った維摩詰は病人の身を現じて、見舞客一人一人にその我見を指摘して痛棒を加える。仏典所説のこんな話とは恐らく無関係ではあろうが、「明暗」制作の作者の立場には一脈それに通じたものがある。大正五年八月二十一日久米正雄、芥川龍之介両氏に宛てた書簡に言う。「僕は不相変「明暗」を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快楽、器械的、此三つをかねてゐます。存外涼しいのが何より仕合せです。夫でも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります」とあって、

尋仙未向碧山行　住在人間足道情
明暗雙雙三萬字　撫摩石印自由成

とある。第一句は「苦痛」を意味し「俗了」を意味するだろう。維摩詰のような達道の居士でない漱石には尤もである。しかし第二句には満足が見える。見舞客の我見に痛棒を加えたような気概がうかゞわれる。「百回近く」といえばお秀に津田の自己本位を鋭く追究させている辺である。そう言えば翻って再び第一句を見ると、「衆生病むが故に我れ病む」と通じないでもない。第三、第四句は「明暗」制作の快適さである。それが「快楽」であろう。尤も「結句に自由成とあるのは少々手前味噌めきますが」と断っているが。要するに閉された自己に籠ることなく、ひろく人間社会を見渡しながらその中には入り込んで制作しているのである。「明暗」はその年の五月二十六日から十二月十四日まで連載されたのだが、五月十八日から同二十八日までの或る日の「日記及断片」の中に、「倫理的にして始めて芸術的なり。真に芸術的なるものは必ず倫理的なり」とある。彼の巧妙な操り様は、単に遊びのための遊びでないことはいうまでもない。

三　一篇の構想

「医者は探りを入れた後で、手術台の上から津田を下ろした。」

作者は一篇の発端をこう書き出して、主人公を病人として登場させる。

「腸迄続いてゐるとすると、癒りつこないんですか」「そんな事はありません」「医者は活潑にまた無雑作に津田の言葉を否定した」。医者には今までの経験でしっかりした自信が出来ている。この医者は作者自身なのである。

「たゞ今迄の様に穴の掃除ばかりしてゐては駄目なんです。それぢや何時迄経つても肉の上がりこはないから、今度は治療法を変へて根本的の手術を一思ひに遣るより外に仕方がありませんね」今迄は「途中に瘢痕の隆起があつた」のを、「つい其処が行き留りだとばかり思つて」いたと言うのは、作者の自己本位がまだ中途半端なものだったことを意味する。だから代助のように、宗助のように、一郎のように、先生のように同じことを繰り返さなければならなかったのである。「穴の掃除ばかりして」癒らなかったのは当然である。

「根本的の治療と云ふと」「切開です。切開して穴と腸と一所にして仕舞ふんでさ。すると天然自然割かれた面の両側が癒着して来ますから、まあ本式に癒るやうになるんです」切開して腐った膿を全部出さなければ駄目なのである。腐った膿、それは「もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな」彼自身の欠点を剔抉することである。自己本位を徹底的に追究することである。すると「天然自然」に癒るというのである。医者が癒すのではない。医者は唯「自然」が旨く受け入れてくれるように持って行くだけである。この医者は「私が癒してあげます」とは決して言っていない。ここに一篇の基調がある。

医者は結核性のものなら駄目だという。「私のは結核性ぢやないんですか」「いえ、結核性ぢやありません」「何うしてそれが分るんですか。たゞの診断で分るんですか」「えゝ。診察た様子で分ります」医者は津田の身体を知悉している。即ち津田の自己本位はかなり限界近くへ来ている。化膿すべきものは化膿している。快癒へは道が立っていることを作者は暗示しているのである。

第二章は、去年「荒川堤へ花見に行つた帰り途から何等の予告なしに突発した当時の疼痛に就いて、」回想する医者から帰る電車の中である。

「白いベットの上に横たへられた無残な自分の姿が明らかに見えた。鎖を切つて逃げる事が出来ない時に犬の出すやうな自分の唸り声が判然聞こえた。それから冷たい刃物の光と、それが互に触れ合ふ音と、最後に突然両方の肺臓から一度

に空気を搾り出するやうな恐しい力の圧迫と、圧された空気が圧されながらに収縮する事が出来ないために起るとしか思はれない劇しい苦痛とが、彼の記憶を襲つた」。津田の自己本位は自己崩壊の第三期へ来ている。彼はその苦痛と不安と恐怖を始めて感じたのである。「此肉体はいつ何時どんな変に会はないとも限らない。それどころか、今現に何んな変が此肉体のうちに起りつゝあるかも知れない。さうして自分は全く知らずにゐる。恐しい事だ」。自己本位ではどうにもならない限界が見えて来たのである。合理ではどうにもならないものを感じて来たのである。「精神界も全く同じ事だ。何時どう変るか分らない。さうして其変る所を己は見たのだ」。近代人である津田は、苟しくも非合理に屈服しなければならないから、「思はず唇を固く結んで恰も自尊心を傷つけられた人のやうな眼」をしなければならなかった。すると、「暗い不可思議な力が右へ行くべき彼を左に押し遣つたり、前に進むべき彼を後に引き戻したりするやうに思へた。しかも彼はつひぞ今迄自分の行動に就いて他から牽制を受けた覚えがなかつた。為る事はみんな自分の力で為、言ふ事は悉く自分の力で言つたに相違なかつた」。近代人としての理性と自由意志とではどうしても片付かないものゝあることを感じ始めたのである。彼はその無気味さに「暗い不可思議な力」と言う。「道草」の最後で健三は、「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない」と「苦々し」く言ったものである。「明暗」の方は合理が非合理に屈服されそうな現状に津田が「自尊心を傷つけられた」所から始まる。ところで作者の構想では、自己本位から疼く津田の苦痛・不安・恐怖が、彼の精神の病気を快癒に転じる更生力となるように運ばなければならない。「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう。それは自分で行かうと思つたから行つたに違ひない。然し何うしても彼所へ嫁に行く筈はなかつたのに」。自分の計算が当てにならないと言うのである。「此己は又何うして彼の女と結婚したのだらう。それも己が貰はうと思ったからこそ結婚が成立したに違ひない。然し己は未だ嘗て彼の女を貰はうとは思ってゐなかったのに。」計算だけでなく最早自分自身が当てにならないというのである。こうなれば自己本位の拠り所さえない。にも拘らず彼は逃げて行った女を「そんな筈はなかつたのに」と追っかけようとする。一方又「貰はうと思つてゐなかつた」女を恰もそうでなかったかのように見せかけようとする。この執着と虚偽とが実は津田の病根なのである。彼の見苦しい自己本位の種々相はそこから来ているのである。

以上最初の二章で、「明暗」一篇は十分方向づけられている。後は執着と虚偽のため彼はその不安にどう苦しむか、それを様々の場面で様々の角度から追究しようとするに過ぎない。そうした追究の果、漸く「天然自然」に魂の解放と真実

が、訪れることになるであろう。夜が更けるだけ更けると、「暗」の底から朝が「明」けて来るように。

四　主題の展開(I)

――津田の側から――

A　執着からの不安

今度叔父夫婦の世話で結婚する小林の妹のことを聞いて、「一体結婚を、さう容易く考へて構はないものか知ら。僕には何だか不真面目な様な気がして不可ないがな」と津田が言うと、「色々選り好みをした揚句、御嫁さんを貰つた後でも、まだ選り好みをして落ち附かずにゐる人よりも、此方の方が何の位真面目だか解りやしない」（三十章）と叔母が窘める。それを聞く津田には心当りがあるものだから平気では聞けない。彼の不安はここで点火される。

津田は「平生から小林を軽蔑する事に於て、何の容赦も加へなかつた」にも拘らず、彼の入院中留守宅に細君のお延を訪ねて行ったと聞いて、「突然一種の恐怖」を感じる。「何をいふか分らない」というのである。居合わせた妹のお秀は「笑い出した」くらいである。「何を云つたつて、構はないぢやありませんか、小林さんなんか。あんな人のいふ事なんぞ、誰も本気にするものはありやしないわ」「だつて燐寸（マッチ）一本だつて、大きな家を焼かうと思へば焼く事も出来るぢやないか」恐怖を抱いている津田は頓でもないことを口走つてしまつた。「其代り火が移らなければそれ迄でせう。幾箱燐寸を抱へ込んでゐたつて。嫂さんはあんな人に火を附けられるやうな女ぢやありません。それとも……」（九十八章）却てお秀の疑いに油を注ぐような結果になった。到頭お秀が叫ぶように言う。「それ丈なら可いんです。然し兄さんのはそれ丈ぢやないんです。嫂さんを大事にしてゐながら、まだ外にも大事にしてゐる人があるんです」。「何だ」「それだから兄さんは嫂さんを怖がるのです。しかし其怖がるのは――」（百二章）この時津田にとっては意外なことが起った。「お秀が斯う云ひかけた時、病室の襖がすうと開い」て、「蒼白い顔をしたお延の姿が突然二人の前に現はれた」からである。

果して小林はお延に津田の痛い所をほのめかしていたのである。「津田は私の夫です。妻の前で夫の人格を疑るやうな

言葉を、遠廻しにでも出した以上、それを綺麗に説明するのは、あなたの義務ぢやありませんか」と、帰りかける小林にお延が迫ると、「僕は義務だの責任だのつて感じの少ない人間だから、一旦云つた事を取り消す位は何でもありません。――ぢや津田君に対する失言を取り消しませう」と言つて取り合わない。却て「彼女の前に姿勢を正し」て、「ここに改めて言明します。津田君は立派な人格を具へた人です。紳士です。（もし社会にさういふ特別な階級が存存するならば）」（八十八章）などと、お延を愚弄して彼女の疑惑を募らせていた。けれども面と向かってはお延は津田に対してお秀のようにあけすけ言う女ではなかった。「さういふ場合になると、彼女は全く津田の手に余る細君であつた」。あの時津田の方でも、その後で起ったお秀の騒ぎでお延に訊く暇がなかったのであるが、翌日小林が病院へやって来た時、彼から何とかして聞き出そうとするが、小林は例の調子で本音を吐かない。「なに何も云やしないよ。嘘だと思ふなら、もう一遍お延さんに訊いて見給へ。尤も僕は帰りがけに悪いと思つたから詫つて来たがね。実を云ふと、何で詫つたか、僕自身にも解らない位のものさ」（百十七章）と嘯いて余計に津田を苛々させる。

小林から今日吉川夫人が此所へ訪ねて来ると聞かされると、今まで待っていたお延に来られては迷惑になった。彼には「夫人と差向ひで話して見たい特殊な問題も控へてゐた」。この前入院の挨拶に夫人を訪ねた時、「行きますよ、少し貴方に話す事があるから。お延さんの前ぢや話しにくい事なんから」（十二章）と夫人が言っていたから。これは津田の秘密の女に関係したことなのである。彼は小林が帰るや否や急いで今日は少し都合があるから見舞に来るのを見合せるようにとお延に手紙を書いて、病院の車夫に託した。それを読むお延にどんな疑惑を抱かせる結果になるかを顧慮する間もなく。彼は今にも「お延がもう宅を出て、電車に乗つて、此方の方角へ向つて動いて来るやうな気」がする。「もし自分の目的が達せられない先に、細君が階子段の上に、すらりとした其姿を現はすとすれば、それは小林の罪に相違ない」（百二十二章）と考えたりする。津田はもう小林恐怖病に取り憑かれている。

愈々当のお延が現われる。吉川夫人が帰った夕方である。「是をもう一遍見て頂戴」と果して例の手紙を取り出す。「別段何も書いちやないぢやないか」といいながら、「既に疑はれる丈の弱味を有つてゐる彼は、遣り損なつたと思つた。」

「何も書いてないから、其理由を伺ふんです」。お延の鉾先は鋭い。逃げ廻る津田は追っ立てられてへどもどする。「嘘よ。貴方の仰しやる事はみんな嘘よ。貴方はあたしを胡魔化さうと思つて、わざ〳〵そんな拵へ事を仰しやるのよ」「あれは誰方が持つて入らしつたんです」お延は先刻吉川夫人が持って来た楓の盆栽を見て、突然「吉川の奥さんが入らしつたぢやありませんか」と言う。お延は夫人が津田の秘密の女にかゝわりのあることをかぎつけている。「何うして知つてるんだ」（百四十六章）と津田はびっくりする。

女であるお延には高を括っている津田も、小林にはそうはいかない。津田が退院して、朝鮮へ落ち延びる小林を料理屋で送る席で、小林が、「君はあの清子さんといふ女に熱中してゐたらう。一しきりは、何でも彼でもあの女でなけりやならないやうな事を云つたろう。所が何うだい結果は」（百六十章）、小林は到頭女の名をいゝ出して来た。それが津田の秘密の女なのである。「結果は今の如くさ」「大変淡泊してゐるぢやないか」「だつて外に仕様がなからう」「いや、あるんだらう。あっても乙に気取つて澄ましてゐるんだらう。でなければ僕に隠して今でも何か遣つてるんだらう」「馬鹿いふな」「実は」「実は何うしたんだ」「実は此間君の細君にすつかり話しちまつたんだ」「何を？」「嘘だよ。実は嘘だよ。さう心配する事はないよ」「心配はしない。今になつて其位の事を云附けられたつて」「心配しない？　さうか、ぢや此方も本当だ。実は本当だよ。みんな話しちまつたんだよ」「馬鹿つ」津田はすっかり小林の手中にある。「君は自分の好みでお延さんを貰つたらう。だけれども今の君は決してお延さんに満足してゐるんぢやなからう」「だつて世の中に完全なものゝない以上、それも已むを得ないぢやないか」「といふ理由を附けて、もつと上等なのを探し廻る気だらう」前に叔母が言ったと同じことをいう。「人聞きの悪い事を云ふな、失敬な。君は実際自分でいふ通りの無頼漢だね。観察の下卑て皮肉な所から云つても、言動の無遠慮で、粗野な所から云つても」「さうしてそれが君の軽蔑に値する所以なんだ」「勿論さ」「そうね。さう来るから畢竟口先ぢや駄目なんだ。矢つ張実戦でなくっちや君は悟れないよ。僕が予言するから見てゐろ。今に戦ひが始まるから。其時慚く僕の敵でないといふ意味が分るから」「構はない。擦れつ枯らしに負けるのは僕の名誉だから」「強情だな。僕と戦ふんぢやないぜ」「ぢや誰と戦ふんだ」「君は今既に腹の中で戦ひつゝあるんだ。それがもう少しすると実際の行為になつて外へ出る丈なんだ。余裕が君を煽動して無益の負戦をさせるんだ」（百

六十章）作者は津田の執着即ち彼の自己本位が、その不安のため自己分裂を起こし、内部から崩壊しようとすることを暗示しているのである。

「少し用があるんだ」といって立とうとする津田を小林は留め、「右の手で背広の右前を摑んで、左の手を隠袋の中へ入れた。彼は暗闇で物を探るやうに、しばらく入れた手を、背広の裏側で動かしながら、其間始終眼を津田の顔へぴつたり附けてゐた。すると急に突飛な光景が、津田の頭の中に描き出された」「此奴は懐から短銃を出すんぢやないだらうか」。（百六十三章）津田は完全に恐怖病に取り憑かれてしまった。自己本位の不安が毒素を発生して彼の脳中枢を侵すようなものである。

津田の恐怖病は、彼が吉川夫人の勧めで湯河原の温泉へ清子に会いに来て、愈々会おうとする直前、明かるい朝の光線の中で再発した症状は更に深酷である。津田は、「突然玄関へ馬車を横附けに」して、「怒鳴り込むやうな大きな声を出して彼の室へ入つてくる小林の姿を眼前に髣髴した。」「何しに来た」「貴方を厭がらせに来たんだ」今の「君」が「貴様」になっている。「何ういふ理由で」「理由も糸瓜もあるもんか。貴様がおれを厭がる間は、何時迄経つても何処へ行つても、たゞ追掛けるんだ」「畜生つ」前の時の「馬鹿つ」が「畜生つ」に変っている。「津田は突然拳を固めて小林は抵抗する代りに、忽ち大の字になつて室の真中へ踏ん反り返らなければならなかつた。」「撲つたな、此野郎、さあ何うでもしろ」「丸で舞台の上でなければ見られない活劇が演ぜられなければならなかつた。さうしてそれが宿中の視聴を脅やかさなければならなかつた。其中には是非とも清子が交じつてゐなければならなかつた。万事は永久に打ち砕かれなければならなかつた」。（百八十一章）「ぞつとして我に返つ」た津田は、漸く気を取り直して、「僕は静養のため昨夜此所へ来ました」と名刺の裏に書いて、清子の部屋へ案内を頼むのであった。直接部屋へ入って行くのでなく、案内を頼むだけでこれだけの恐怖を感じなければならないとすれば、彼の押して来た自己本位は既に自己喪失に変っているのも同然である。

B 虚偽からの不安

元来津田という男はサラリーマン的知識階級の悪い面ばかりから出来上った人物である。彼は勤務上の主人吉川夫婦が

お延との結婚の媒酌人であることに光栄を感じている。そこには利害から割り出された打算がある。何よりも虚栄心の満足がある。「津田は吉川とは特別の知り合ひである」。「彼は時々斯ういふ事実を背中に背負つて」「みんなの前に立ちたくなつた」。しかしさすがに近代人である彼は、「自ら重んずる」「態度を毫も崩さずに此事実を背負つてゐたかつた」（九章）。彼は吉川の「細君から子供扱ひにされるのを好いてゐた」。しかし「同時に彼は吉川の細君などが何うしても子供扱ひにする事の出来ない自己を裕かに有つてゐた」。従って「背後は何時でも自分の築いた厚い重い壁に綺りかゝつてゐた」（十二章）。彼は虚栄によって自己を失わない。どんな時でもその自己本位を優越感の中で支えようとするのである。

津田にはまたお延に対して、「父の財産を実際より遥か余計な額に見積つた所を」「吹聴」したいという虚栄心がある。のみならず、「彼のお延に匂はせた自分は、今より大変楽な身分にゐる若旦那であつた。必要な場合には、幾何でも父から補助を仰ぐ事が出来」るように見せかけている。「お延と結婚した時の彼は、もう是丈の言責を」背負っていた。「黄金の光から愛其物が生まれると迄信ずる事の出来る彼には、何うかしてお延の手前を取り繕はなければならないといふ不安があつた。ことに彼は此点に於てお延から軽蔑されるのを深く恐れた。堀（お秀の夫）に依頼して毎月父から助けて貰ふやうにしたのも、実は必要以外に斯んな魂膽が潜んでゐたからでもあつた」。（百十三章）所で退職地方官吏である彼の父というのは「無意味に近い節倹家」で、津田の盆暮貰う賞与を割いて月々の補助の代償に充てさせるという堀の立てた方針を、津田が履行しないという理由で最近送金を拒絶して来ているのである。病院の入費には差詰め困る津田は、一層のことお延に事情を打ち明けてしまおうかとも思うのであるが、「彼はお延の虚栄心をよく知り抜いてゐた。それに出来る丈の満足を与へる事が、また取りも直さず彼の虚栄心に外ならなかつた。お延の自分に対する信用を突き崩すの は、自分で自分に打撲傷を与へるようなもの」（九十七章）と思っている。自尊心の強い彼は、一方また金のことで「精神的にも形式的にも」妹のお秀には頭を下げたくなかった。彼は胸の中で「お延に事情を打ち明ける苦痛と、お秀から補助を受ける不愉快とを」天秤にかける。「一層二つのうちで後の方を冒したら何んなものだらうかと考へ」る。彼はお延の機嫌を買うためには、以上のようなやゝこしい計算をする。

それでは津田は心からお延を愛しているのかというと、それがまた彼の勘定から来ている。お秀は津田がお延を大事にするのは自分に秘密がある弱味からだと見ているのに対して、吉川夫人の方はそうではない。「貴方はみんなが考へてゐる通り、腹の中ではそれ程延子さんを大事にしていらつしやらないでせう。あたしは疾うからさう睨んでゐるんですが、何うです」（百三十五章）とすっぱぬいている。「貴方は良人（うち）や岡本の手前があるので、それであんなに延子さんを大事になさるんでせう。もつと露骨なのが御望みなら、まだ露骨にだつて云へますよ。」岡本というのはお延の叔父で、吉川の親友でもある。相当の金持である。「岡本の財産を調べないで、君が結婚するものか」（百十七章）とかって小林からなぶられた位である。その時「お延さんさへ大事にしてゐれば間違ひはないんだから」（百十八章）とも彼は言った。「私の性質なり態度なりが奥さんにさう見えますか」というと、「見えますよ」と「一刀で斬られ」てしまっている。

打算的な津田には元来夫人の「一顰一笑が悉く問題に」なる。食べ物を鼻先にぶらさげられると芸をする犬と同じこともする。その時も「一体貴方は延子さんを何う思つていらっしやるの」と出しぬけに訊かれて返答に困っていると、「ぢや仕方がないから私の方で云ひませうか。可ございますか」といった夫人が、「でも若しか、貴方に怒られると夫つ切りですからね」というと、「大丈夫です。偽だらうが本当だらうが、奥さんの仰しやる事なら決して腹は立てませんから」（百三十五章）ということ位は何でもない。それのみならず、彼が今まであれほど清子の事をお延に隠していたのに、どうやら夫人は「お延にそれを気（け）どつてゐて貰ひたいらし」いのだと見て取ると、「もし必要なら話しても好ございますが……」（百三十八章）と言い出す。採算が取れるなら彼は妻を売ることすら敢えて辞しない。

夫人は津田を清子のいる温泉へやらしておいて、一方お延を「もつと奥さんらしい奥さんに」教育してやるのだと言う。これにはさすがの津田も弱った。「彼の気に入らない欠点が、必ずしも夫人の難の打ち所とは限らなかつた。それをちやんぽんに混同してゐるらしい夫人は、少くとも自分に都合の可いお延を鍛へ上げる事が、即ち津田のために最も適当な細君を作り出す所以だと誤解してゐるらしかつた」。「彼女はたゞお延を好かないために、ある手段を拵へて、相手を苛めに掛かるのかも分らな」いという懸念が彼にはあった。「御任せしても可いんですが、手段や方法が解つてゐるなら伺つて置く方が便利かと思ひます」。「心配する事があるもんですか。細工はりう〳〵仕上げを御覧じろつて云ふぢやありませんか」と「いくら訊いても詳しい話をしな」い。「あの方は少し己惚（うぬぼ）れ過ぎてる所があるのよ。それから内側と外側が

まだ一致しないのね」。「それに利巧だから外へは出さないけれども、あれで中々慢気が多いのよ。だからそんなものを皆取っちまはなくつちや……」（百四十二章）。

津田は「大体の上で夫人の実意を信じて掛かつた。然し実意の作用に至ると、勢ひ危惧の念が伴なはざるを得ない」まゝに、結局お延の運命を他人に委ねてしまうことになった。それでいて例の「自己を裕かに有つてゐた」に相違ない。彼がそれほど吉川夫人を大事にするのは、結局自分自身が大事だからである。彼の自己本位はそれほど細かい算盤づくなのである。

「男らしく未練の片を附けて来る」ために、吉川夫人は津田に湯河原にいる清子に会って来るようにという。旅費もやる、勤向きの都合も附けて貰ってやるという。「天然自然来たやうな顔をして澄ましてゐるんです」という。「自己の快楽を人間の主題にして生活しようとする津田には滅多にない誂へ向きの機会であつた。彼に云はせると、見す〳〵それを取り外すのは愚の極であった。然しこの場合附帯してゐる一種の条件は決して尋常なものではなかつた。彼は顧慮」（百四十一章）せざるを得ない。夫人は頻りに煽りにかゝるが、彼はなかなか腰をあげない。「だから畢竟清子さんに逃げられちまつたんです」、「貴方は臆病なんです」、「さう見識ばるのが取りも直さず貴方の臆病な所なんですよ」と、さん〳〵に追い立てられて到頭行くことにするが、夫人の意見を十分納得している訳ではない。自己本位者の彼は自分がまだ決断を下していないものを、行動に移さなければならないように余儀されたのである。今までの彼ならどんな時でも夫人なんかが指さえ触れることの出来ない「自己を裕かに有つてゐた」のであった。彼はその自己本位の果に、測らずも自己を裏切るものを、自己を売るものを自己の底から掘り出さなければならなくなった。「右に行くべき彼を左に押し遺つたり、」（二章）する彼の所謂「暗い不可思議な力」が、ここにも待ち構えていたのである。

漱石は既に「人生」（明治二十九年）の中で「自己の意志を離れ、卒然として起り、驀地に来るもの」、「世俗之を名づけて狂気と呼ぶ」と言ったものである。湯河原へ行く夜の馬車の中で、津田はこれを「夢」（百七十一章）という。「顧ると、過去から持ち越した此一条の夢が、是から目的地へ着くと同時に、からりと覚めるのかしら。それは吉川夫人の意見であつた。」「然しそれは果して事実だらうか。自分の夢は果して綺麗に拭ひ去られるだらうか」。「彼はもう自分の主人

公ではな」くなってしまた。彼はその夜宿の洗面所で「自分の幽霊」に出遇う。元来「彼は眼鼻立の整つた好男子であつた。顔の肌理も男として勿体ない位濃やかに出来上がつてゐた。彼は何時でも其所に自信を有つてゐた。鏡に対する結果としては此自信を確める場合ばかりが彼の記憶に残つてゐた。だから何時もと違つた不満足な印象が鏡の中に現はれた時に、彼は少し驚いた。是が自分だと認定する前に、是は自分の幽霊だといふ気が先づ彼の心を襲つた」。（百五十五章）津田はそんな状態で廊下で迷つたのである。漸くに自分の部屋へ帰つて床に潜り込んでから、「殆んど夢中歩行者のやう」だつたと、反省する。「慥かに常軌を逸した心理作用の支配を受けてゐた。常識に見捨てられた例の少ない彼としては珍らしい此気分は、今床の中に安臥する彼から見れば、恥づべき状態に違ひなかつた。然し外聞が悪いといふ事を外にして、何故あんな心持になつたものだらうかと、たゞ其原因を考へる丈でも、説明は出来なかつた」。（百七十七章）

あれほど逞しい自己本位者が到頭自己喪失者となりそうである。あれほど綿密に算盤を弾いてあったのに、どうやら帳尻が合わなくなって来た。合理の底から非合理が黒々と横倒わっているのが見えて来た。

五　主題の展開（Ⅱ）

――お延の側から――

同じ自己本位者でもお延は津田とは異る。津田のような卑屈な使用人根性がない。裕福な岡本の叔父の家で育っただけあって、陰険な所がない。女性的な技巧は聊か過剰であるが、積極的で、一途で、実行力に富んでいる。家庭的な勤勉さえある。自分で「津田を見出だした彼女はすぐ彼を愛した。彼を愛した彼女はすぐ彼の許に嫁ぎたい希望を保護者に打ち明けた。さうして其許諾と共にすぐ彼に嫁いだ。冒頭から結末に至る迄、彼女は何時でも彼女の主人公であつた。又責任者であつた。自分の料簡を余所にして、他人の考へなどを頼りたがつた覚えはいまだ嘗てなかつた」。（六十五章）彼女は作中の女性の中では最も近代的である。

彼女の叔父の岡本は「初対面から津田を好いて」はいなかった。「何うしてお延のやうな女が、津田を愛し得るのだらうという疑問」を今も「持ち続けてゐ」る。「人間を見損なつたのは、自分でなくて、却てお延なのだといふ断定」が叔

父の心に沈澱している。今のお延には実際津田は「手前勝手な男」に見えた。「自分の朝夕尽くしてゐる親切は、随分精一杯な積りでゐるのに、夫の要求する犠牲には際限がないのかしらんといふ疑念が」あった。にも拘らず、自分の結婚について「一種の気位」を持っている彼女は、親しい叔母にすら世間の「良人といふもの」について聞くのを控えている。それでいて内実は「毎日土俵の上で顔を合はせて相撲を取つてゐるやうな夫婦」（四十七章）生活をしているのである。彼女には既に「自分の結婚ですら斯う」（六十五章）なのだという失望が電のように閃く。だからといってまだ自己を投げ出す気にはなれなかった。反対に益々自己本位に徹しようと決意する。「たゞ愛するのよ、さうして愛させるのよ。さうさへすれば幸福になる見込は幾何でもあるのよ」。（七十二章）従妹の継子のために言った言葉であるが、「お延の頭の中には、自分の相手としての津田ばかりが鮮明に動い」て継子のことを忘れていた。其晩彼女は家に帰ると、「此所迄行く事を改めて心に誓つた。此所迄行つて落附く事を自分の意志に命令した」。（七十八章）だから津田の留守中、外套を取りに来た小林から夫の秘密をほのめかされた時、「私はまた生きてて人に笑はれる位なら、一層死んでしまつた方が好いと思ひます」（八十七章）と敢然と言って退けるのである。然しさすがに小林が帰ると、「津田の机の前に坐るや否や、其上に突伏してわつと泣いた」。（八十八章）「彼女は満足する迄自分を泣き尽くした時」、「いきなり机の抽斗を開け」、そこにないと本箱の抽斗をあさった。錠を卸さない所に探すものがある筈がない。「突然疑惑の焔が彼女の胸に燃え上がつた。一束の古手紙へ油を濺いで、それを綺麗に庭先で焼き尽くしてゐる津田の姿が……」津田の秘密を嗅ぎつけた彼女は、その正体を突き止めようと死にもの狂いに戦う。その戦いぶりを見て見よう。

相手は「愛した経験も、生一本に愛された記憶も有たない」お秀だけれど、夫の妹だというので、お延は「津田は女に関して何んな考へを有つてゐるんでせう」（百二十八章）と訊かずにはいられない。お秀が「延子さんなら大丈夫よ」というと、「大丈夫だけれども危険いのよ。何うしても秀子さんから詳しい話を聴かして頂かないと」と言ってしまう。お秀が逃げると、「吉川の奥さんからも伺つた事があるのよ」と自分にも思いがけない「嘘」を言う。（口にしたことは嘘であるが、彼女には吉川夫人がこの問題に「或聯絡」を持つていそうに思はれてならない）前の日は金のことでお秀の小姑根性、即ち嫉妬や出しゃ張りを小気味よく叩きつけておきながら、「だから昨日のやうな気高い心持ちになつて、此小さ

いお延を憐んで頂きたいのよ。もし昨日のあたしが悪かつたら、斯うしてあなたの前に手を突いて詫るから」と実際「頭を下げ」る。「秀子さん、何うぞ隠さず正直にして下さい。さうしてみんな打ち明けて下さい。お延は此通り正直にしてゐます。此通り後悔してゐます」（百二十九章）と「涙」を流す。これは勿論芝居であるが、津田の秘密が握れるならどんなことでもするのである。そこに彼女の自己本位がある。

「延子さんは随分勝手な方ね。御自身独り精一杯愛されなくつちや気が済まないと見えるのね」「無論よ」彼女の調子は高い。「だつて自分より外の女は、有れども無きが如しつてやうな素直な夫が世の中にゐる筈がないぢやなりませんか。」「それがあたしの理想なの。其所迄行かなくつちや承知が出来ないの」。「いくら理想だつてそりや駄目よ」。「然し完全な愛は其所迄行つて始めて味ははれるんでせう。其所迄行き尽くさなければ、本式の愛情は生涯経つたつて、感ずる訳に行かないぢやありませんか」。これは芝居ではない。自ら選んだ結婚に対して自己の可能性を究めようとするのである。彼女は火の球となって燃える。「あなた丈を女と思へと仰しやるのね。そりや解るわ。けれども外の女を女と思つちや不可ないとなると丸で自殺と同じ事よ。もし外の女を女と思はずにゐられる位の夫なら、肝心のあなただつて、矢つ張り女とは思はないでせう。自分の宅の庭に咲いた花丈が本当の花で、世間にあるのは花ぢやない枯草だといふのと同じ事ですもの」「枯草で可いと思ひますわ」「あなたには可いでせう。けれども男には枯草でないんだから仕方がありませんわ。それよりか好きな女が世の中にいくらでもあるうちで、あなたが一番好かれてゐる方が、嫂さんに取つても却て満足ぢやありませんか」。「あたしは何うしても絶対に愛されて見たいの。比較なんか始めから嫌ひなんだから」。（百三十章）お秀のような愛の常識家にはお延の理想主義は分からない。お延はたゞ「軽蔑」されるだけである。「たゞ実例を御見せになる丈なの。其方が結構だわね」。お延は「地団太を踏ん」で口惜しがる。お秀を突っ附いて肝心の大事を握ることが出来なかったのみならず、却て「裏からわざ〳〵匂はせられ」るようなことになり、お負けに「此方の弱点を見抜かれ」はしなかったかという疑惑に駆られる。極度に鋭くなった彼女の神経は、今自分に対して或る「謀計」が仕組まれていることを感知する。「主媒者は誰にしろ、お秀が其一人」（百四十三章）、それに吉川夫人が関係してゐることも「明らかに推測され」る。そんな気持でお秀の家を出て病院へ行く途中、通りで見た電車の中で夫人の影を見付けた。夫人が津田の所へ見舞に行ったとすれば——。「彼女の頭は急にお秀から吉川夫人、吉川夫人から津田へと飛び移つ」て、「三人が巴のやう

に」廻転し始めた。敵の「重囲のうちに自分を見出だした孤軍のやうな心境」で一旦帰宅して、例の短い津田の手紙を見たのである。「彼女の心は躍つた」。（百四十三章）病院へ行って、「嘘よ。貴方の仰しやることはみんな嘘よ」と叫んで、「吉川の奥さんが入らつしたぢやありませんか」（百四十六章）と食ってかかったのはその後間もなくである。自己本位者の「孤軍」奮闘が始まる。果して敵の「重囲を突破することが出来るかどうか。

お延はそこでも津田をつつき廻さねばならなかった。津田は飽くまでも奥を見せまいと防戦に努める。「然し守る夫に弱点がある以上、攻める細君にそれ丈の強味が加はるのは自然の理であ」る。だから彼女は「戦はない先にもう優者」なのだが、彼女の目的は勝ったゞけでは仕方がない。後に控えている疑を晴らすことにある。「彼女は思慮分別の許す限り、全身を挙げて其所へ拘泥らなければならなかつた。それは彼女の自然であつた。然し不幸な事に、自然全体は彼女よりも大きかつた。彼女の遙か上にも続いてゐた。公平な光を放つて、可憐な彼女を殺さうとしてさへ憚らなかつた」。（百四十七章）

自己本位者は例えば自己という提燈の光を頼りに暗の中を行くようなものである。明かるいのは足下だけで、無限に拡がっている暗には気が附かない。一旦遠くを見る必要が起こるともう役に立たない。提燈の光、即ち自己の力の限界に直面する。其所を強いて進まうとすると、「世間にあるのは花ぢやない、枯草だ」と思わせようとするような無理が起こる。愈々お延にも限界線が見えて来た。

「彼女が一口拘泥るたびに、津田は一足彼女から退いた。二口拘泥れば、二足退いた。拘泥るごとに、津田と彼女の距離はだん〳〵増して行つた。大きな自然は、彼女の小さい自然から出た行為を遠慮なく蹂躙した。一歩ごとに彼女の目的を破壊して悔いなかつた。彼女は暗に其所へ気が附いた。けれども其意味を悟る事は出来なかつた」お延は「そんな筈はない」がと始めて自分を疑つた。（先に津田が吉川夫人から清子に会って来よと迫られて、「そんな見識はたゞの見栄」だ。世間に対する手前と気兼ねを引いたら後に何が残るん」だと責め立てられて、「呆気に取られ」たのと同じである）彼女もまた「暗」の深部に突き当った。

「お延は急に大き声を揚げ」た。「あたしは憑り掛かりたいんです。安心したいんです。何の位憑り掛かりたがつてゐるか、貴方には想像が附かない位、憑り掛かりたいんです」。「あなた、あなた、何うぞあたしを安心させて下さい。助けると思つて安心させて下さい。貴方以外にあたしは憑り掛かり所がない女なんですから。あなたに外されると、あたしはそれぎり倒れてしまはなければならない心細い女なんですから。だから何うぞ安心しろと云つて下さい。たつた一口で可いから安心しろと云つて下さい」。(百四十九章)到頭彼女を自己を放棄してしまった。その結果はどうであったか。「大丈夫だよ。安心おしよ」と津田は言って「お延を慰めにかかつた」。彼女は「久し振に結婚以前の津田を見た」。それは彼女には新しい経験である。今迄の彼女は夫に愛されたいばかりに、「わが腕に依頼する信念があつた。自分の見識を立て通して見せるといふ覚悟があつた。」それは「夫の愛が自分の存在上、如何に必要であらうとも、頭を下げて憐みを乞ふやうな見苦しい真似は出来ないといふ意地に過ぎなかつた。もし夫が自分の思ふ通り自分を愛さないならば、腕の力で自由にして見せるといふ堅い決心であつた。のべつに此決心を実行して来た彼女は、詰りのべつに緊張してゐるのと同じ事であつた。さうして其緊張の極度は何処かで破裂するに極まつてゐた。破裂すれば、自分で自分の見識を打ち壊くのと同じ結果に陥るのは明瞭であつた。不幸な彼女は此矛盾に気が附かずに邁進した。それでとう〳〵破裂した。破裂した後で彼女は漸くに悔いた。仕合せな事に自然は思つたより残酷でなかつた。彼女は自分の弱点を曝け出すと共に一種の報酬を得た」。(百五十章)

自己本位を途中で引込めるのでなく、押して押して押し切った極点に、自ら足下に展開して来る世界、その「暗」の底から生まれ出る「明」かるさ、これが一篇のテーマである。小説は終結しなかったが、一篇の精神は十分方向づけられていると言った所以である。「断片」(大正四年頃)に、作者は、

「心機一転。外部の刺戟による。又内部の膠着力による」と言っているのは、正に今のお延の心境を説明したものと言うことが出来る。彼女は小規模ながら心機一転した、小林・お秀・吉川夫人・津田という外部の刺戟によって、夫の愛を独占しようとする内部の膠着力によって。しかしそうは言って見た所で、彼女には依然として例の秘密は解明されていない。その代り「万一の場合が出た時は」、「おれが請け合」おうと言うことになって、二人の間には津田から申し込んだ停戦協定——「妥協」が成立した。しかし相手の津田にはお延ほどの真剣さがないため、「畢竟女は慰撫し易いものである」

とごまかす自信を得たに止まって、彼女だけの域には達しなかった。そのためこの後も彼は自分の幽霊に出遇ったり、幽霊の小林に乗り込まれたりして苦しまなければならない。けれども彼の場合でもその精神更生の方向は決定している。

六　主題の展開（Ⅲ）

――その他の人物の側から――

津田を温泉へ遣らしておいて、その留守にお延を津田のために、「奥さんらしい奥さんに」「教育」しようと吉川夫人は計画をしているが、これは他人の自己を冒瀆することである。

お延には「己惚れ過ぎてる所がある」、「それから内側と外側がまだ一致しない」という。それは事実である。だからといって、他人が容喙して可い問題だろうか。人にはそれ〴〵自分のコースがある。お延は、自分で選んだ結婚に飽くまで責任を持とうとしている。再教育の名においてその「慢気」を取ろうとすることは、角を矯めて牛を殺す結果にならないとも限らない。夫人こそ、その夫の「金力」と「権力」とを傘に着た放埒な、無責任な、前近代的な女である。「権力とは自分の個性を他人の頭の上に無理矢理に圧し付ける道具なのです。金力は個性を拡張するために、他人の上に誘惑の道具として使用し得る至極重宝なものです」（私の個人主義）と、作者は戒めている。夫人はその戒めを破ろうとする。旅費を与え、気の進まない津田を清子の所へ駆り立てたのもそれである。作者は同じ講演の中で、「権力に伴なう義務」「金力に伴なう責任」を強調する。

「こゝろ」の先生はKの厳格なストイシズムを理解することが出来ず、その寒々とした孤独から救うのだと言って、無理に自分の下宿に連れて来た。「私は彼を人間らしくする第一の手段として、まづ異性の傍に彼を坐らせる方法を講じたのです。さうして其所から出る空気に彼を曝した上、錆び付きかゝつた彼の血液を新らしくしようと試みたのです」。（遺書二十五章）月々の下宿代も、「金の形で彼の前に並べて見せると、彼は屹度それを受取る時に躊躇するだらうと思」うので、「彼の知らない間にそつと」（同二十三章）渡しておくのであった。こうした先生の友情に発する善意の結果はど

うなったか。Kを破滅させ、自分も破滅させる外の何物でもなかったのである。その善意も結局は相手の自由意志を縛り上げて「人間らしく」更生してやるのだという不遜なおせっかいに過ぎないからである。まして夫人の動機には、津田の方はさて措き、お延に対しては善意は認められないのである。怜悧なお延を小憎らしく思う、多分に嫉妬から発するものを認めない訳には行かない。

自己本位それ自体は救済を齎さない。それを中途で捨てゝは尚更齎さない。しかしそれに徹する時に、徹してどうにもならなくなった時に、救済は天来の啓示として来るのである。今更夫人の容喙を要しないのである。自己本位すら近代人には救済にはならないのに、ましてそれ以前のおせっかいがならないのは当然である。

「断片」（大正四年一月頃より十一月頃まで）に言う。

×自分が自覚して善もしくは美と信じたる事は到底人の勧告に応じて其否を肯はず。

×だから人を啓発するといふ事は、先方で一歩足を此方へ踏み込んだ時に手を出して援ける時に限る。

自分の結婚に責任を持ち、持つことを善と信じているお延は、夫人の領分へ足を入れようともしていないのである。夫人の計画は必ず失敗に終らなければならない。まして津田が湯河原へ立つ前日、お延は「近いうちに」「此御肚（なか）の中に有つてる勇気を、外へ出さなくつちやならない日が来るに違ひない」と津田にいうのみならず、「夫人の技巧には時として恐るべき破壊力が伴なつて来はしまいかといふ危険」（五十三章）をかって感じたお延である。危機は近い。お延はどんな爆発を試みるかも知れない。そうしてそれは夫人のおせっかいが、必ず導火線となるに違いない。この夫人は先に清子のことで失敗している。津田のために大丈夫だ請合って、相手に逃げられている。独断的なためである。今またお延に泡を吹かされる予定にあるようである。未完であるこの小説にそういう傾斜が見える。作者は吉川夫人を通して前近代的な主従関係を批判しようとするのである。

お秀はお延とは対蹠的な存在である。お延の近代人に対してお秀もまた前近代人である。彼女は放蕩者である夫に「器量望みで貰はれ」て、現に二人の子供の母であり、しっかりした姑がいる。夫の弟も妹も同居している。「下町の質屋を聯想させる」「大きな鉄の天水桶」が玄関に据わった家に住んでいることでも分かる。彼女は夫婦二人ぎりのお延と違っ

て、早くから世帯染みている。彼女は派手好きなお延が気に食わない。伸び〳〵と自由の利くお延が嫉しい。兄が父に対する約束を履行しないのはお延がそれをさせないからだと、勝手な身贔屓を捨てない。そういう眼でお延を見ているので、常に小姑らしい僻見がある。津田がお延を大事にするのは、兄には秘密があるからだと決め込んでいるものだから、（この点は吉川夫人の方が正しい）勝手な正義観を振り廻して、「兄さん、妹は兄の人格に対して口を出す権利がないものでせうか」。「もし左右した疑ひを妹が少しでも持つてゐるなら、綺麗にそれを晴らして呉れるのが兄の義務――」（百二章）とまくし立てたりもする。従って守銭奴のような父の味方でもある。津田の妹だけあって、彼女も仲々の打算家であり策略家でもある。兄のため用意して来た金も、兄が頭を下げそうにないと見ると容易には出さない。「上げませうか」（九十九章）と兄の鼻先に散らつかせていつまでも焦らせにかゝる。所でそこへやって来たお延が、「良人に絶対に必要なものは、あたしがちやんと拵へる丈なのよ」（百七章）といってぽんと小切手を出すと、高く売りつけようとしていた「妹の親切」を売り損ねたため、今度は兄夫婦にさん〳〵説法を始めて、すさまじい長広舌を振う。それでいて自分の行為がすべておせっかいであることに気が附かない。だから彼女はその腹癒せがまだ足りなくて、吉川夫人に走って、夫人を動かして復讐しようと企てる。此所には作者の前近代的な「家」に対する批判が見える。

漱石の作品で小林のような人物は珍しい。彼は性格破産者である。作者が小林を創造したことは津田の弱点を衝くためである。そんな意味で二人はまた対蹠的な存在である。しかし津田が卑劣であるように、彼もまた卑劣である。貧乏している彼は人の幸福が嫉しい。「誰と喧嘩したつて」「僕の得になる丈なんだから」と嘯いて、津田を脅して物にしようとする。「面白い秘密でも提供して、岡本さんから少し取つて行くかな」（百十七章）という。しかしながら彼の言うことには現代文明を生きる者に対する批判がある。第一、「身分も地位も財産も一定の職業もない僕だ」と馬鹿にしてかゝるが、「是が吉川夫人か誰かの口から出るなら、もつとずつと詰らない説でも、君は襟を正して聴くに違ひないんだ」と、権勢に対して自主性がないという。第二に、「頭では解る、然し胸では納得しない、是が現在の君なんだ」と、実行力がないという。第三、「君には余裕があり過ぎる。好きなものを手に入れるや否や、すぐ其次のものが欲しくなる」と、利己的な享楽主義者であるという。彼は批判者であるばかりでなく教育者でもあろうとする。無法に虐待されている或る青

年の手紙をわざ〳〵津田に読ませて「君は此手紙の内容に対して」「世間的には無関係」でも道義的にはそうは行かないだろうと、冷たい津田の胸から人間愛を掻き立てようとする。彼はそれを口で言うだけでなく津田の面前で実行して見せる。津田から貰った金を「さあ取り給へ。要る丈取り給へ」（百六十五章）といって、来合わせていた自分よりも更に貧しい画家の原に取らせるのがそれである。漱石の作品には今までも文明批評者はあった。けれどもその治療を志す者はなかった。来るべき津田の「心機一転」のため「外部の刺戟」として彼もまた一役を担っているのである。

蔭の女としての清子は、百三十七章に至って始めて吉川夫人の口からその名が紹介せられる。その姿を現わすのは百七十六章、温泉宿の夜の廊下の階子段の上である。百八十八章で未完のまゝで終るこの小説では、清子のことはほんの発端だけである。そうして彼女は、姿を現わすや否や「津田を階下に残した儘」自分の部屋へ「引返」す。その「後を向いた様子、電気を消して上り口の案内を閉塞した所作、忽ち下女を呼び寄せるために鳴らした電鈴の音、凡てが警戒であつた。注意であつた。さうした絶縁であつた」（百十七章）と津田が反省した位である。すると、今後少くとも清子の方からは新しい問題が起ろうとは考えられない。彼女はお延とは違う。お延は「津田に一寸の余裕も与へない女であつた。其代り自分にも五分の寛ぎさへ残して置く事の出来ない性質に生れ附いてゐた。」「勢ひ津田は始終受身で応戦すべく緊張と苦痛と努力の窮屈さを嘗め」させられた。所が清子の前に出ると「段取りは逆になつた」。彼はいつも「伸び〳〵した心持で」対することが出来た。果して翌日彼が改めて清子の部屋を訪ねた時、「関君はどうしました。相変らず御勉強ですか。其後御無沙汰をして一向御目に掛かりませんが」（百八十五章）と、「何の気も附かずに会話の皮切りに清子の夫を問題にする」位、本来の自分に返っている。これは珍しい。打算的な彼が、「平生の細心にも似ず、一顧の懸念さへなく、たゞ無雑作に話頭に上す」ことの出来た事は、清子の人柄に包まれたゝめである。実際この場合、「清子の夫を問題にする事の可否は、利害関係」は勿論、「今日迄自分等二人の間に起つた感情の行き掛り上から考へても」、「実は一思案しなければならない点であつた」筈である。二人の中へ津田自身の手で彼女の夫を連れて来たと同じである。これでは津田の方からも新しい問題が起ろうとも思えない。

「だけど貴方は大分彼所に立つていらつしやたらしいのね」「迷児になつて、行く先が分らなくなりや仕方がないぢや

ありませんか」「成程、そりや左右ね」と、「清子の口にした成程といふ言葉が、如何にも成程と合点したらしい調子を帯びてゐる」。ところで津田は清子に、「一体何だつて、そんな事を疑つていらつしやるんです」「それでは、僕が何のために貴方を廊下の隅で待ち伏せてゐたんです」「何処から其疑ひが出て来たんです」と、相変らず理屈詰めで追求して行こうとすると、清子の方は、「もし疑るのが悪ければ、謝ります」という。「だつてそりや仕方がないわ。疑つたのは事実ですもの。其事実を白状したのも事実ですもの。いくら謝つたつて何うしたつて事実を取り消さす訳には行かないんですもの」。彼女の世界は津田と違って理屈の世界でなく事実の世界である。事実の世界は理屈では片付かない世界である。その代り「思慮分別」に労わされないで落ち着いていられる。

「昨夕そんなに驚いた貴方が、今朝は又何うしてそんなに平気でゐられるんでせう」と訊かれて、「たゞ昨夕はあゝで、今朝は斯うなの。それ丈よ」。ここでも彼女は「事実」を言う。驚いたのも事実なら、平気なのも事実だというのである。柳は緑、花は紅である。

一篇の最後の場面は次のように終る。

「貴方は何時頃迄御出でです」「予定なんか丸でないのよ。宅から電報が来れば、今日にでも帰らなくつちやならないわ」「そんなものが来るんですか」「そりや何とも云へないわ」、行雲流水である。「清子は斯う云って微笑」するのである。「津田は其微笑の意味を一人で説明しようと試みながら帰つた」とある。説明が附けば彼は始めて救済されるであろう。現在は救済されていなくても、現に津田は清子と向かい合うなり、無造作に技巧を捨てている。「アートと人格、人格の感化は悪人が善人に降参する事」と例の「断片」に見える。彼女は、津田とは勿論、お延ともお秀とも小林とも乃至吉川夫人とも、対蹠的な人物である。

七　結　び

作者は、事実の世界を清子によって始めて津田に示すのではない。「議論にならなくても、事実の上で、あたしの方が由雄（津田）さんに勝つてるんだから仕方がない」（三十一章）と、結婚問題について既に藤井の叔母に言わせている。「私は言葉に重きを置いてゐやしません。事実を問題にしてゐるんです」（百二章）と、兄を追い詰めたお秀の口からも

言わせている。その時津田は言う。「事実とは何だ。己の頭の中にある事実が、御前のやうな教養に乏しい女に捕まへられると思ふのか。馬鹿め。」いかにも津田らしい。事実までも彼には頭の中にあるのだが、それでは救われることはない。「私はたゞ私の眼に映つた通りの事実を云ふ丈です。それを何うして貰ひたいといふのではありません。」（百九章）これは兄夫婦に向かって言わせた言葉である。津田が吉川夫人から「貴方は清子さんにまだ未練がおありでせう」と訊かれて、「さう勝手に認定されてしまつちや堪りません」というと、「私のは認定ぢやありません。事実ですよ。貴方と私丈に知れてゐる事実を云ふのですよ。事実ですもの、それをちやんと知つてゐる私に隠せる訳がないぢやありませんか、いくら外の人を騙す事が出来たつて。それもあなた丈の事実ならまだしも、二人に共通な事実なんだから」（百三十八章）と夫人に言わせている。小林が「是でも実際の君を指摘してゐる積りなんだから。分らなけりや事実で教へて遣らうか」といって、「君は自分の好みでお延さんを貰つたらう。だけれども今の君は決してお延さんに満足してゐるんぢやなからう」「だつて世の中に完全なものゝない以上、それも已むを得ないぢやないか」と津田が答えると、「そらね。さう来るから畢竟口先きぢや駄目なんだ。矢つ張り実戦でなくちや君は悟れないよ。僕が予言するから見てゐろ。今に戦ひが始まるから、其時慚く僕の敵でないといふ意味が分るから」（百六十章）と小林に言わせている。――こうして津田を取り巻くものみんなに「事実」を言わせているのであるが、その都度彼は素直に受け入れようとはしない。機縁がまだ熟さないのである。

「明暗」一篇は津田の精神更生記だといっても、先にも述べた通り作者自ら手を取って治療を加えるのではない。人形使いの立場に立つ作者は、いろ〳〵の人物と交渉させる中にそこへ運んで行くに過ぎない。真理は常に身近にある。「如何に人間が下賤であらうとも、又如何に無教育であらうとも、時として其人の口から、涙がこぼれる程難有い」（三十五章）言葉が聞かれるとある。彼等はその分に応じて悟り得たものを言っているのである。

津田の見逃がしていたものは「事実」である。自己本位者は馬車馬のように一方的で極めて視野が狭い。「事実」とは視野に入らない全域である。理屈をもってしては割り切れない世界であり、片付かない世界である。

「断片」（大正四年一月頃より十一月頃まで）にいう。

「形式論理で人の口を塞ぐ事は出来るけれども人の心を服する事は出来ない。それでは無論理で人の心を服する事が出

来るのか。そんな筈もない。論理は実質から湧き出すから生きてくるのである。ころ柿が甘い白砂糖を内部から吹き出すやうなものである。形式的な論理は人形に正宗の刀を持たせたと一般で、実質の推移から出る——否推移其物をあとづけると鮮やかに読まれる自然の論理は、名人が名刀を持つたと同じ事で、決して離れ〳〵にはならないのである。」ここに言う「実質」とか「自然」とかいうのは「事実」のことである。実質の推移から出る論理とは、清子の言った「昨夕はあゝで、今朝は斯うなの」がそれである。津田の場合、今の自己から新しい自己が生まれて来なければ「事実」が見えるわけがない。例の「断片」にいう。「技巧の変化（右、左、縦、横、筋違、）さうしていづれも不成功の時、どうしたら成功するだらう？　といふ質問を出して又次の技巧を考へる。さうして技巧は如何なる技巧でも駄目だといふ事には気がつかず。人間の万事はこと〴〵く技巧で解決のつくものと考へる。さうして凡ての技巧のうちどれかゞ中るだらうと思ふ。彼等が誠に帰るのは何時の日であらう」津田は全くそういう人物である。「事実」が見えるということは、「誠に帰る」ことでもある。これは今一つの自己の誕生を待つより手がない。このことを晩年の作者はどんなにか翹望したことだろう。

漱石は大正五年十一月二十二日五度目の胃潰瘍で倒れ、十二月九日に亡くなったのであるが、倒れる前、即ち十一月十日に鬼村元成氏への書簡で、「坊さん方の奇特な心掛は感心なものです。……私は私相応に自分の分にある丈の方針と心掛で道を修める積りです。気がついて見るとすべて至らぬ事ばかりです。行住坐臥ともに虚偽で充ち〳〵てゐます。此次御目にかゝる時にはもう少し偉い人間になつてゐたいと思ひます。あなたは二十二私は五十歳は二十七程違ひます。」二十七才も年下の一青年僧に漱石は全身を投じて我が罪を告白している。その謙虚さに深い感動を覚える。これが「明暗」の最後近くを書いていた作者の心境である。津田と漱石の違いは、「虚偽に充ち〳〵てゐ」ることに「気がついて」いるかいないかである。気がつくということは新しい自己に生れ変るということである。

「道を修める」といっても漱石の場合は俗世間を捨て去って只管に漢詩や文人画に隠遁することではない。飽くまでも市井の中にあって小説を書くことによってすることである。片付かない中に安住しようとすることである。同十五日今一人の青年僧富沢敬道氏に宛てた書簡の中の詩に、「長生未向蓬萊去　不老只當養一真」と言っているのでも分かる。彼は自分一人が救われるというようなことばかりを考えていなかったのである。「私は五十になつて始めて道に志さす事に気のついた愚物です。其道がいつ手に入るだらうと考へると大変な距離があるやうに思はれて吃驚してゐます。……私は貴

方方の奇特な心得を深く礼拝してゐます。……私がもつと偉ければ宅へくる若い人ももつと偉くなる筈だと考へると実に自分の至らない所が情なくなります」。ここでも「気がついた」と言っている所は前のと同じであるが、「宅へくる若い人」のところには、教育者的な責任感が見える。漱石の所には木曜会というのがあって若い人々が集った。（明治三十九年十月中旬から面会日を木曜日午後三時以後ときめ、最後のそれは翌日の十六日であった。）そういう漱石が独善的に世捨人となるようなことは考えられない。「明暗」にはそういう教育的愛が蔵（かく）されている。

久米・芥川両氏に与えた例の詩を再び考えて見る。

尋仙未向碧山去　住在人間足道情
明暗雙雙三萬字　撫摩石印自由成

第一第二句は「長生」の詩と同様彼の道を求める求め方である。即ち飽くまでも市井の中にあってしているのだということであり、第三第四句は先にも言ったように「明暗」制作に対する自負である。彼の道を求める求め方からすると、道を求めることが、芸術を制作することになる。求道即制作である。「明暗」はそうした立場で書かれたものである。「事実」の世界を達観する彼は「人形使い」となった所以である。

それにしてもあれだけの抱負をもって書かれたこの小説が未完に終ったことは愛惜に堪えない。その後彼が生きていれば、更に優れたものを書いたであろう。彼のような道の求め方をする人が、そのために小説を書くことを止めることは考えられないからである。

――一九五七・二・三――